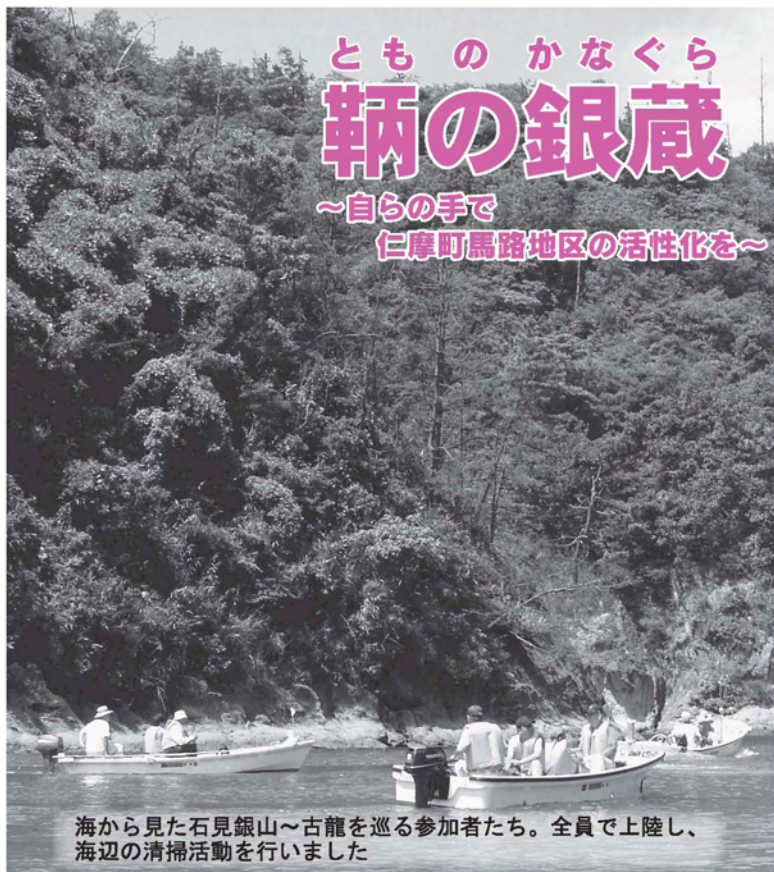


とものかなくら 鞆の銀蔵

～自らの手で
仁摩町馬路地区の活性化を～



海から見た石見銀山～古龍を巡る参加者たち。全員で上陸し、海辺の清掃活動を行いました

「鞆の銀蔵」とは…

鞆の銀蔵は、石見銀山遺跡の世界遺産登録を契機に仁摩町馬路地区の地域資源を活用したツーリズムを展開し、馬路地区を盛り上げようと、平成18年4月に地元の有志が集まり立ち上げた地域活性化グループです。

馬路の「鞆ヶ浦」は16世紀前半から中ごろにかけて、銀鉱石を積み出すための港として

て利用され、岩盤を掘った鉱石の保管庫があったといわれています。「鞆の銀蔵」という名前は、江戸時代、大森代官所で銀などを保管していた蔵を「御銀蔵」と呼んでいたことにちなんで付けました。

関心の高かった

「海から見た石見銀山」

昨年8月に、今後の体験事業の参考とするため、伝馬船で幻の港町・古龍（温泉津町

に古龍の浜に上陸しました。

食と感動の積み出し港

「鞆の銀蔵」を目指し

現在「鞆の銀蔵」は鞆ヶ浦を訪れる人に「食と感動」を提供しようと、ふるさと島根

定住財団の助成を受け、築80年の民家を解体して古い材木を再利用し、民泊施設を建設中です。今年4月の完成を目指し、急ピッチで作業が進められています。

湯里地内)を巡るツアーを開催しました。かつて古龍は、石見銀山から採掘された銀鉱石の積み出し港として栄えた港町と推定されていますが、現在は道も荒廃し、船での上陸しかできないため、幻の港町といわれています。

鞆ヶ浦を出港し、古龍まで往復する約40分のツアーには、募集定員の約2倍の42人が参加しました。

普段は見ることができないリアス式の海岸線を海上から眺め、参加者は深い感動とともに

この施設を拠点とし、地元海産物を食材とする食堂や、土産物の販売、各種体験事業、観光案内事業を行うこととしています。なかでも、各種体験事業では、伝馬船でめぐる洞窟探検、大敷（定置網）体験、鍔絵体験など馬路を五感で感じるさまざまなプログラムを考えています。

代表の山根俊隆さん（68）

は、「不安はあるが、やるからには成功させなければならぬ。『鞆の銀蔵』の活動により、地元の雇用機会も増え、地域の活性化につながる」と、熱く語ります。

今後は、観光客の増加が予想されますが、その受け皿と

中四国初！

緑と水の連絡会議が「認定NPO法人」

に認定されました！

第3号で紹介した「NPO法人緑と水の連絡会議（高橋泰子理事長、会員数80人）が、昨年12月1日に、運営組織や事業活動が適切で公益の増進に資するなどの一定の要件を満たしたとして、国税庁長官から認定NPO法人として認められました。

全国に約3万あるNPO法人の中で認定されている法人

して「鞆の銀蔵」への周囲の期待も大きく膨んでいます。



は、49法人（同日現在）ほどで、中四国地方では初めての認定です。

これにより、同会議へ個人が寄附した場合は、所得税の寄附金控除の対象となり、法人の場合は一般寄附金の損金算入限度額とは別枠で一定限度額まで損金に算入されます。高橋理事長は、「寄附という形で、私たちの環境保全活動を国民の皆様にご支援いただけたら嬉しい。」と活動への理解を願っています。